

(1) 革命前夜

独裁者ポルフィリオ・ディアスの台頭

1907年、メキシコ政局最大の関心事は、三年後に予定されている大統領選挙にポルフィリオ・ディアス大統領が再出馬するか否かであった。そうした中、ディアスはアメリカのジャーナリスト、ジェームス・クレエルマンのインタビューに応じた。クレエルマンの意図はアメリカの一般大衆や投資家のために、今後のメキシコの政局について再確認をすることであった。このインタビューの内容は翌年「ピアソンズ・マガジン」三月号に堂々たるディアスの写真入で掲載された。「ディアス大統領・アメリカ大陸の英雄」というタイトルの記事は、老人は1910年、八回目の再選を果たすのかというメキシコ人にとって最も深刻な質問に初めて直接回答を与えるものとなった。ディアスは説明した。正真正銘の民主主義に戻るためには、細心の注意が必要である。メキシコのような国にとって抽象的な民主主義を効果的に実践するためには自ずと異なった方法を取る必要がある。また、民主主義はメキシコに根付いた、とも言った。過去数十年の間、彼の指導によりもたらされた秩序と平和、そして経済発展によりこの国の将来は約束されている、とクレエルマンは太鼓判を押した。ディアスは過去27年間メキシコを治め、その権力を持ってすれば、自分の頭に王冠を載せることはた易いことであると思われた。然し気まぐれであったのか、意外な発言をした。「私はメキシコ共和国が、選挙の度ごとに、武器による革命の危険もなく、国の信用を傷つけず、国の発展を妨げることなく政府を交代させることが出来る日を辛抱強く待った。私はそのときが既に来ていると信じている。自分はこの任期の終わりに引退する」そして、「私はメキシコ共和国の中で反対党を歓迎する。もしそれが現れれば、有害なものとはせず承認する。もしそれらが政権を持てるだけの力があるならば、自分のことは忘れて、我が国の民主主義政府が成功裏に完成するよう味方となり、援助をし、助言を惜しまない。この国が究極の自由を謳歌する下地は出来ている」と強調した。この記事にたいするワシントンの反応はまちまちであったが、メキシコでは一大センセーションを巻き起こした。老人は言葉どおりに受け止められ、ディアスが承認するはずの反対党を結成するときに来たと、多くの者が感じた。¹

ポルフィリオ・ディアスはメキシコ人がこよなく愛すベニート・フアレス大統領と同じオアハカ州の出身である。ポルフィリオは1830年、クリオーヨ（メキシコ生まれのスペイン人）ホセ・ファウスティノ・ディアスとミスチック・インディアン²の母、ペトゥロナ・モリ³の間に生まれた。鍛冶屋、皮のなめし、ラバ追いをしていた父親は三歳のときに亡くなり、母親の手で育てられ、早くから父親の後を継いで家計を助けた。ポルフィリオは宗教教育を授けられたが、小さな頃から軍人に憧れ、軍隊に入り26歳で大尉に任命された。折から改革戦争と呼ばれた動乱の最中、幾多の戦火を潜り抜け、抜群の評価を受けるよう

になった。保守派とリベラル派の間で戦われた内戦は、アメリカの援助もあり、ベラルが勝利して教会と国政は分離されることになった。ベニート・フアレスは 1861 年、大統領に再選されたが政情は不安定であった。メキシコが改革戦争で分断している頃、アメリカでも南北戦争が始まった。²

アメリカが内戦で身動きできない間に、もう一度アメリカ大陸に再び咲く野望を抱いたナポレオン三世はメキシコ介入を決断した。一方メキシコの保守派の間ではヨーロッパから皇帝を迎える動きがあった。白羽の矢が当たったのはハプスブルグ皇帝フランツ・ジョセフの弟、皇太子フェルディナンド・マキシミアン・ヴォン・ハプスブルグであった。ナポレオンは三千の将校と 1 万 1 千の兵を送り込み、首都を制圧した。1864 年 5 月、マキシミアンとシャーロットはベラクルースに到着した。メキシコの皇后となるシャーロットはベルギー国王レオポルド一世の娘で、メキシコではカルロッタの愛称で親しまれた。ベラクルースでは二人が期待していた歓迎のアーチもなく、群集も見られなかった。フアレス政府は北へ北へと逃れ、ついにはリオグランデ河岸エルパソ・デル・ノルテまで追い詰められた。³

南北戦争が終わり、拙い選択をしたと感じていたナポレオン三世がメキシコ撤退を決断するのに時間はかからなかった。1868 年 1 月 15 日、軍隊引き上げの決断が下され、マキシミアンは動揺した。撤退は一年以内に行われることになった。米国の圧力、プロシアの脅威、フランスの世論、マキシミアン帝国の財政上の不始末が原因に上げられた。マキシミアンの対応策はイギリスに助けを求めるか退位することであったが、カルロッタは退位に猛然と反対した。彼女はヨーロッパへ行きナポレオン三世に翻意を促し、法王に話をしようとベラクルースへ向かった。このニュースはリベラルたちの間に野火のように広がり、荷物をまとめ始めたフランス軍に勝利を予感したフアレス軍は、次第に勢いを増していった。⁴

カルロッタはナポレオン三世に謁見した。ナポレオンはのらりくらりと逃げ回り、一文の金も一人の兵士も出さなかった。カルロッタにはナポレオンがメフィストフェレスの極悪人に見えた。ローマ法王を訪問中、カルロッタには精神異常の兆候が見られるようになった。カルロッタは自分の死を予感し、マキシミアンに別れの手紙を書いてベルギーのお城に引き籠った。死ぬと思われた彼女は長い隠遁生活を送り、悲劇の登場人物の誰よりも長く生き、1927 年に亡くなった。⁵ 1867 年 2 月、最後のフランス兵がメキシコを去った。ポルフィリオ・ディアスは 4 月 2 日のプエブラ戦においてマキシミアン帝国に致命的な打撃を与え、その三ヵ月後メキシコ市を開放した。マキシミアンは僅かな腹心と共にケレタロで最後の抵抗を試み、70 日間も包囲された末捕らえられ、6 月 19 日、町を見下ろす丘の上で銃殺された。⁶

1867年7月15日、共和国と共に四年間逃げ回った末、フアレスは首都に帰還した。その数週間前から首都は輝かしいオアハカのジェネラル・ポルフィリオ・ディアスによって守られていた。ディアスは37歳、既に数々の戦勝経験があった。市民はフアレスを「二度目の独立」を勝ち取ったとして歓迎した。保守主義は完全に敗退し、二度と国政の場に戻る事は無かった。フアレスが取り戻した秩序は植民地時代と全く異なる原理に則っていた。それらは法による統治、世俗的政治と教育制度、市場経済の導入、真の自由民権である。国が消滅の縁にあったとき、法に則った政権の基礎を築き、猛威を振るった二つの嵐に耐えて国家変革を成し遂げた功績は大きい。7

ベニート・フアレスは純血のサポテック・インディアンである。フランシスコ・マデロ大統領を暗殺して政権を握るビクトリアノ・ウエルタも又、純血のウィチオル・インディアンであった。ネーティブ・アメリカンが合衆国の大統領に成ることなど、絶対に考えられないことが、何故メキシコで起ったのであろうか。

スペインは征服を正当化するため、アメリカ原住民の文明化を義務付けた。神と国王への義務は、インディアンをキリスト教信者にすることであった。偶像崇拜は悪そのものであり、文明化とはスペインの法と権威の下に造った都に住むことであった。最初の宣教師は征服者であり、エンコメンダの管理者であり、インディアンの保護者であった。スペインの征服は性的な征服でもあった。エルナン・コルテスはメキシコ最初のマチョで、マリンチェを犯してインディアンの情婦をつくった。スペイン人は本国から女性を伴わず、ひたすら金を求め、金持ちになって本国へ帰り、高い地位を得ることを願った。掠奪品が山分けされ、金が底をつくると、エンコミエンダで労働者とし使うインディアンを分配した。

ブリティッシュ・アメリカにおけるインディアンとの関係は全く異なっていた。アメリカ人はインディアンを戦争中毒にかかった「狂暴な野蛮人」と呼んだ。これは清教徒の考えを汲むものであった。清教徒達は古いイギリスの独裁者から逃れ、荒野に神の国を築くためにニューイングランドへやってきた。彼等は清純さ、神の摂理、神の恵み、神の召命などの教義に夢中であったが故に、悪魔に取り付かれた罪人は共同社会から排除しなくてはならなかった。ニューイングランドの先住民は、神が我々の信仰心を試すために、天から落ちた高慢な反逆天使長ルシファーである、として彼らを「悪魔の穴に棲む悪魔」と見た。悪魔は神の都から追放し、抹殺しなくてはならなかった。1637年ペクォット・インディアン戦争の後、リチャード・メーザーは教会の会衆の前で「今日この日、私たちは六百人の野蛮人たちを地獄に落しました」と神に感謝した。スペインとは対照的に北米の植民地では原住民を文明化するという感覚もなく、勿論方針もなかった。イギリスはアメリカの植民地帝国で市民としてインディアンを取り込むことを考え出せなかった。初期のアメリカ人は、イギリスがニュージージーランドで行ったように、マオリと白人をぎこちなく共存させたのと異なり、インディアンを只単に西に追い払うだけであった。8

教訓を学んだ地方の族長、州の指導者や軍隊はフアレス政権に対して反旗を掲げる事はなくなった。フアレスは元に戻る事の無い新しい時代と歴史の創始者であった。それは連邦主義制度を介した中央集権主義であり、それにも増して、地域、地方、州を越えて我々国家と言う概念を植え付けた。共和国が回復できた 1867 年、フアレスは選挙を施行した。彼の競争相手は介入戦争で勝利したポルフィリオ・ディアスだけで、フアレスは 72%の票を獲得した。

反革命勢力に勝利し、二度目の独立を確保したが、治安を回復することは出来なかった。平和を妨げたのはリベラル内部における新旧両勢力間の対立であった。ベラクルースで憲法を起草した知識人や法律家に対し、改革戦争から二度目の独立戦争までの十年間を戦ってきた若い将校たちの反発であった。フアレスが数万の兵を退役させたことに彼らは憤慨した。確かに八万の軍隊が僅かな国家予算を食い潰すことは明らかであったが、軍人の間で不満が高まった。軍部は文官の支配下に置かれることに我慢ならず、間もなくリベラル時代最初の叛乱が発生することになった。

その他の脅威は追剥ぎ、山賊、人攫いであった。都市を結ぶ街道には、内戦の混乱に乗じて盗賊がはびこっていた。政府は前科のある者を雇い、ルラーレと呼ぶ僻地警察組織を創設して取り締まりにあたった。最後はインディアン族長とその勇士たちで、ナヤリットではアリシアの虎と呼ばれたマヌエル・ロサダが独立国のように振舞っていた。更に北にはソノラ州ヤキ平原のヤキ・インディアンが叛乱、ユカタン半島ではマヤが執拗に白人を襲い、南のチアパスでは土地のクリオーヨとインディアンの間でカースト戦争が起こった。フアレスは時間をかけ、金と労力を費やして暴動や反乱を鎮圧した。彼に反対して蜂起した軍部は敗れても再び潮時を見て立ち上がり、山賊は金品のため、インディアンは種族の威信のため、戦争状態は永久に続いた。⁹

1871 年、フアレスは再選を目指した。国は未だ混沌として、継続を正当化できる状況ではなかった。新しい世代の人たちがドアを叩いていたが、65 歳の大統領はドアを開けようとはしなかった。フアレスは十五年間政権を握ってきたが、自分で辞めるとは言わなかった。彼の友人で、よき助言者、最後まで忠誠を誓ったセバスチャン・レルド・デ・テハダは見限り、自分で立候補した。もう一人強力なライバルがいた。若者のアイドル、ポルフィリオ・ディアスである。フアレスが得た票は 47%、これまでで最も疑わしい勝利であった。フアレスはどんどんと力を失っていった。

オアハカでは 1871 年のフアレス再選に反対したポルフィリオ・ディアスがノリア計画を掲げて蜂起した。「有効な投票、再選反対」を掲げた企ては失敗し、ディアスは北西部の山中に逃げた。選挙の翌年、フアレスは突然心臓麻痺のために亡くなり、セバスチャン・レルド・デ・テハダが大統領を引き継いだ。それから四年後、痺れを切らしたディアスはトゥステペックで革命を起こし、軍事的勝利を収めた。1876 年 11 月 23 日、ディアスがメキシコ市に凱旋したとき、誰もが新しい時代の到来を感じた。ディアスは選挙を行い、長い間待ち望んだ大統領の椅子を獲得した。¹⁰

1. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P232
2. Ibid. P175
3. Jasper Ridley, "Maximilian & Juarez", 1992, P225
4. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P182
5. Jasper Ridley, "Maximilian & Juarez", 1992, P281
6. Ibid. P269
7. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P203
8. W. Dirk Raat, "Mexico and the United States: Ambivalent vistas, The Georgia University Press, 1996, P36
9. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P199
10. Ibid. P215